

# 英語の進行相の指導に関する一考察

橋本 美喜男

A Study of an Effective Teaching of English Progressive Aspect

HASHIMOTO, Mikio

大分大学教育学部研究紀要 第40巻第1号

2018年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 40, No. 1, September 2018

OITA, JAPAN

## 英語の進行相の指導に関する一考察

橋本美喜男\*

【要旨】 中学校で学習する文法項目の中の1つに進行相があり、大学生でも日本語にする場合、機械的に「～している。」と日本語にすることが多い。「活動動詞」を用いている文である **John is running in the park.** の場合、すべての学生が「ジョンは公園を走っている。」と正確な解釈ができるが、「到達動詞」を用いた **The bus is stopping.** を日本語にするときは、「バスは止まっている」とほとんどの学生が誤った解釈をしてしまう。本論では、どのような文法指導が効果的にこのような間違いをなくすことができるのか、を考察する。

【キーワード】 進行相 活動動詞 到達動詞

### 1. はじめに

本論文の目的は、「到達動詞」が使用された文が進行相で使用された場合、大学1年生においてさえ正確な理解ができていない状況が存在することを指摘すると同時に、どのような指導を行えば理解度が増すのかを考察する。仮説として、英語の進行相の性質と動詞の分類だけではなく、日本語の動詞の分類についても指導を行えば、学生の理解を促すことができることを提案し、妥当な仮説かどうか確かめる第一歩としたい。

具体的には、教育学部の1年生の総合英語を2クラス担当しているので、小テストの一部として以下の問題を2クラス（便宜上、クラスAとクラスBと呼ぶことにする。）に課し、どの程度理解しているのかを把握する。

- 1 以下の英文を日本語にきなさい。
  - a. **John is running in the park.**
  - b. **The bus is stopping.**

(1a)の英文では「活動動詞」が使用されており、(1b)の英文では「到達動詞」が使用されている。上記の問題を学生に日本語訳をさせ、「活動動詞」を用いた場合と「到達動詞」を用いた場合においてどの程度の理解の差があるのかを調べる。

---

平成30年5月30日受理

\*はしもと・みきお 大分大学教育学部 言語教育講座（英語学）

次に、クラス A には宗宮(2012)に基づく英語の進行相の特徴と英語の動詞分類を説明し、クラス B にはクラス A の説明内容とともに宗宮(2012)に基づく日本語の動詞の分類と藤井(1966)に基づく「～テイル形」の意味の分類に関する説明も行った。その 1 ヶ月後、同じ問題とその類題を出し、理解度に変化があるのかを見た。

調査の流れは以下の通りである。

表 1

|       | 4月10, 12日           | 4月17, 19日                   | 5月15, 17日                 |
|-------|---------------------|-----------------------------|---------------------------|
| クラス A | 第1回目の小テスト(1a, b)を出題 | 英語の進行相と英語の動詞分類について説明した。     | 第2回目の小テスト(2a)から(2h)を出題した。 |
| クラス B | 第1回目の小テスト(1a, )を出題  | 上記の説明に加えて、日本語の動詞分類について説明した。 | 第2回目のテスト(2a)から(2h)を出題した。  |

第2回目の小テストで出した問題は以下の通りである。括弧で示しているのは、文に使用されている動詞の種類を表している。

2 以下の英文を日本語にきなさい。

- a. John is running in the park. (= 1a) (活動動詞)
- b. The bus is stopping. (= 1b) (到達動詞)
- c. They're studying Spanish. (活動動詞)
- d. He is dying of cancer. (到達動詞)
- e. Is Miho cooking lunch in the kitchen? (活動動詞)
- f. The movie is beginning. (到達動詞)
- g. The curtain is opening. (到達動詞)
- h. She is eating lunch with her friends (活動動詞)

(2a)から(2d)の英文は、英語の進行相と動詞の分類について説明する際に使用したものであるが、(2e)から(2h)の英文は授業での説明では使用していないので、使用されている動詞が「活動動詞」か「到達動詞」かを学生自身が判断する必要があるものである。

第2節では、学生に行った指導内容の背景にある時制と相の考え方について概略する。第3節では、教育学部の1年生がどの程度英語の進行相と動詞の種類の関係について理解しているのかについて示すとともに、進行相と動詞分類に関する指導の後、どの程度理解に変化があったのかを見る。第4節でその結論を述べたい。

## 2. 本論が依拠する時制と相の概念について

学生に対して行った説明は、基本的に宗宮(2012)に基づく。本論で宗宮(2012)を使う理由は主に2つある。1つ目は、英語と日本語のそれぞれの時制と相を同様な体系で分類していることである。2つ目は後で述べる語彙的相において、英語の動詞分類を基本的に日本語にも適用しており、この2点により、英語と日本語における時制と相の対応関係についての説明が学習者にとって煩雑にならないと考えたからである。

宗宮(2012)によれば、英語の時制と相は表 2-1 の通りである。

表 2-1 英語の時制と形式的相 (s)he の場合

|         | 現在時制             | 過去時制             |
|---------|------------------|------------------|
| 単純相     | V-s              | V-ed             |
| 完了相     | has V-ed         | had V-ed         |
| 進行相     | is V-ing         | was V-ing        |
| (完了進行相) | (has been V-ing) | (had been V-ing) |

(宗宮 2012: 1)

日本語の時制と相は表 2-2 の通りであり、英語の時制と相とに対応していることが分かる。

表 2-2 日本語の時制と形式的相

|     | 現在時制 | 過去時制 |
|-----|------|------|
| 単純相 | する   | した   |
| 継続相 | している | していた |
| 完了相 | した   | ×    |

(宗宮 2012: 1)

表 2-1 で表しているように、英語の時制は現在時制と過去時制の2つを認め、Declerck (1991) 等が分類している未来時制という用語は授業での説明では使用しなかった。

英語の形式的相が表す意味は以下の通りである。

表 2-3

|          |             |
|----------|-------------|
| 相(=形式的相) | 相性          |
| 単純相      | 事態の存在       |
| 完了相      | 先立つ事態の存在    |
| 進行相      | 完了に向かう事態の進行 |

(宗宮 2012: 18)

語彙的相の分類には様々あるが、本論では、Vendler (1967)による、四つの分類に基本的に従い、以下のようにそれぞれの特徴をまとめた。

表 2-4 Vendler (1967)の四つの語彙的相の分類のまとめ 4

| 語彙的相 | 特 徴                       |
|------|---------------------------|
| 達成動詞 | 一定の時間がかかり、明確な終結点がある事態を表す。 |
| 活動動詞 | 一定の時間がかかり、明確な終結点がない事態を表す。 |
| 到達動詞 | 瞬間的に終わる事態を表す。             |
| 状態動詞 | 始まりも終わりも含意しないすでに成立している状態  |

前にも述べたように、宗宮(2012)に従い、この動詞の分類は英語だけではなく日本語にも当てはまると仮定する。<sup>1)</sup>

上記の考えに従って、クラス A とクラス B に対して、以下の英文を用いて、進行相は事態の進行を表し、結果状態を表さないことを説明した。

- 3 a. John is running in the park. (活動動詞)  
 b. The bus is stopping. (到達動詞)  
 c. They're studying Spanish. (活動動詞)  
 d. He is dying of cancer. (到達動詞)

上記の説明に加えて、クラス B には日本語の「活動動詞」に「～テイル」がつくと「動作の進行」を表すのに対し、「到達動詞」に「～テイル」がつくと「結果の残存」を表すことを以下の例文を使用して説明し、「到達動詞」の場合は、英語の進行相と日本語の「～テイル形」では表す意味が異なることを示した。

- 4 a. ジョンは公園を走っている。 動作の進行  
 b. バスが止まっている。 結果の残存



h. She is eating lunch with her friends

(活動動詞)

(7a)と(7b)は第1回目の小テストと同一問題であり、(7c)と(7d)は授業での説明で用いた文である。残り4問は初めて目にする問題である。結果は以下の表3-1の通りである。数字は正解者数を表し、括弧はそのパーセントを示す。

表 3-1 第2回小テストの結果

|           | クラス A 36名  | クラス B 34名  |
|-----------|------------|------------|
| (7a) 活動動詞 | 36 (100%)  | 34 (100%)  |
| (7b) 到達動詞 | 31 (86.1%) | 25 (73.5%) |
| (7c) 活動動詞 | 34 (94.4%) | 34 (100%)  |
| (7d) 到達動詞 | 26 (72.2%) | 27 (79.4%) |
| (7e) 活動動詞 | 35 (97.2%) | 33 (94.4%) |
| (7f) 到達動詞 | 14 (38.9%) | 21 (61.8%) |
| (7g) 到達動詞 | 3 (8.3%)   | 10 (29.4%) |
| (7h) 活動動詞 | 36 (100%)  | 34 (100%)  |

第2回小テストを行う前に解説で使用した問題文(7a)から(7d)においては、説明から1カ月ほど経過していたにもかかわらず、特に「到達動詞」の正解率がほぼ0パーセントから70パーセントから80パーセント近くまで、クラスAとクラスB共に上がっている。このことは、英語の進行相の基本的な意味は事態の進行を表すことであり結果状態ではないことと、「活動動詞」と「到達動詞」の特徴に注意を払うように指導することは無駄ではないことを示唆しているように思われる。

次に、説明では用いなかった文(7e)から(7h)の結果を見てみたい。これらの問題はどの程度応用が利くかを見ているものである。「活動動詞」を用いている(7e)と(7h)がほぼ100パーセントできているのは予想できることであるが、問題は「到達動詞」を用いた(7f)と(7g)である。第1回目の小テストの時は、「到達動詞」を用いた文の進行相の解釈については、ほぼ全員が不正解だったのと比較すると、正答率は上がっている。しかし、授業での説明で用いた問題文(7b)と(7d)に比べると正答率は低くなっており、1回の説明だけではなかなか応用ができないことを表しているように思われる。特に、問題文(7g) *The curtain is opening.*の正解率が両クラスとも低いことが目立っている。この文も他の問題文と同様に中学1年生の英語の教科書からとってきたもので、学校の演奏会でステージ上に生徒たちが上がっていて、目の前にある幕が上がりつつ状況を表しているものである。前後に文脈を付けていれば正答率も違ってきたのかもしれないが、今後の課題としたい。

クラスAとクラスBでの(7f)と(7g)に関する正答率の差は、他の問題の正答率の差に比べると大きく、クラスAよりクラスBの方がよくできているように思われる。この正答率の差は、英語の進行相の基本的概念と英語の動詞分類(この場合、「活動動詞」と「到達動詞」)の説明

だけではなく、日本語の動詞の性質、特に「～テイル形」になった場合、解釈が「動作の進行」なのか「結果の残存」なのかを意識させることが重要であることを示唆しているように思われる。ただ、1回だけの結果のみでは断定することはできないので、今後も継続して調査を行いたい。

#### 4. まとめ

教育学部の1年生の総合英語2クラスでの英語の進行相の理解の現状を示すと共に、進行相の理解を促す指導法を考察した。進行相の理解については、「到達動詞」を用いた文の進行相の解釈がほとんどできないことを第1回目の小テストで明らかにした。第1回目の小テストを行った翌週には、クラスAには英語の進行相の基本的な意味と英語の動詞分類、特に「活動動詞」と「到達動詞」に焦点を当てて指導した。一方、クラスBには、クラスAで行った指導に加えて、日本語の動詞において、「～テイル形」になった場合、「動作の進行」と「結果の残存」の解釈の可能性があることを指摘し、英語の進行相を見たら日本語の動詞を反射的に「～テイル形」にしないように注意をした。

この指導を行った約1ヶ月後に第2回小テストを行った。第1回目の小テストの結果と比べると、「到達動詞」を用いた文の進行相の正答率は上昇しているので、両方のクラスで行った英語の進行相に関する指導は一定の効果があったと思われる。さらに、授業での説明では触れていない「到達動詞」を用いた文の進行相(7f,g)においては、クラスAとクラスBで正答率の差が現れた。この正答率の差が示していることは、クラスBで行った日本語の動詞の見分け方を具体的に指導することの有効性を示していると思われる。言い換えると、日本語の動詞に「～テイル」がついたとき、その形が「動作の進行」を表すのか、それとも「結果の残存」を表すのかを意識させることで、今まで英語の進行相を反射的に、言い換えると何も考えずに日本語の「～テイル形」にしていた学生が、動詞の種類によって「～テイル形」になると解釈が異なることを意識することができるようになり、従って、英語の進行相をより正確に解釈することができるようになったと言える。

今回の結果は、英語の進行相と英語の動詞分類の説明とそれに対応する日本語の動詞の性質についても意識させることが有効な指導に繋がることを示唆していると思われるが、今後もこの点については、さらに検討し深めていきたい。

## 注

- 1) 日本語の動詞が「～テイル形」になる場合、中村(2001)が藤井(1966)に基づいて、日本語の動詞が「～テイル形」になった場合、以下の6つの意味があることを示している。
- |          |                                 |
|----------|---------------------------------|
| a. 動作の進行 | 読んでいる。                          |
| b. 持続    | じっとしている。 電気が点いている。              |
| c. 結果の残存 | 結婚している。                         |
| d. 経験    | すでに知り合っている。                     |
| e. 単純状態  | すぐれている。 道が曲がっている。               |
| f. 反復    | 有名人がどんどん死んでいる。 (中村 2001: 11-12) |
- 本論では、このうち「動作の進行」と「結果の残存」が小テストで使用した動詞と関係するので、この2つの意味のみを扱った。
- 2) パーセントは小数点第2位を四捨五入した。以下で表すパーセントも同様である。

## 参考文献

- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』 大修館書店, 東京.  
 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社, 東京.  
 Comrie, Bernard (1976) *Aspect*, Cambridge University Press, Cambridge.  
 Comrie, Bernard (1975) *Tense*, Cambridge University Press, Cambridge.  
 Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar*, Kaitakusha, Tokyo.  
 深田智・仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界』 研究社, 東京.  
 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店, 東京.  
 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』 日本放送出版協会, 東京.  
 今井隆夫 (2010) 『イメージで捉える感覚英文法』 開拓社, 東京.  
 柏野健次 (1999) 『テンスとアスペクトの語法』 開拓社, 東京.  
 久野暉・高見健一 (2005) 『謎解きの英文法 文の意味』 くろしお出版, 東京.  
 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 大修館書店, 東京.  
 中村ちどり (2001) 『日本語の時間表現』 日本語研究叢書 14, くろしお出版, 東京.  
 橋本美喜男 (2018) 「英語の時制と相の指導に関する一考察」 『ことばを編む』, 西岡宣明ほか (編), 380-388, 開拓社, 東京.  
 Radden, Günter and René Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.  
 宗宮喜代子 (2012) 『文化の観点から見た文法の日英対照』 ひつじ書房, 東京.  
 上野義和 (2007) 『英語教育における理論と実践』 英宝社, 東京.  
 安井稔 (1996) 『英文法総覧 (改訂版)』 開拓社, 東京.  
 Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, New York.

# A Study of an Effective Teaching of English Progressive Aspect

HASHIMOTO, Mikio

## Abstract

In this paper two experiments were carried out to search for an effective teaching of progressive aspect in English. In the first experiment first-year students of the Faculty of Education were asked to translate the following English sentences into Japanese.

- a. John is running in the park.
- b. The bus is stopping.

All students put the first sentence into Japanese correctly while they could not translate the second one into the correct Japanese expression. This result may indicate that Japanese students need to understand the verb classification in English because in the above sentences verbs belonging to different classes are used: in the first sentence the verb is an activity verb and in the second an achievement verb. One week after the first experiment the explanation of the basic meaning of progressive aspect and English verb classification was given to the students in Class A. In Class B, in addition to the explanation given to Class A, the students had the explanation of Japanese verb classification. About one month after they had the explanation, the second experiment was conducted. The result may support the idea that an effective teaching of English progressive aspect should make the best use of Japanese grammatical knowledge as well as English.

**【Key words】** progressive aspect, activity verbs, achievement verbs